

アカカタバミ, 19)~20) をオホバアカカタバミ, 21)~23) をアカカタバミ³⁾, 24)~26) をシロアカカタバミと呼ぶ。これではタチカタバミを認めていないが、これは單に傾上性が少し立つただけで直立莖だと云つて特に別にするには及ばないと思う。尙和名は假定的のもので、これらは學名の命名及長枝短枝の詳細と共に後の報告まで保留する。

Résumé

In *Xanthoxalis corniculata* Small, both the glaucousness & the size in leaves, which were hitherto overlooked, seem to be stable and useful ones as the diagnostic characters. Usual leaflets are about 1—2 cm in length & 1.5—2.5 cm in width, but the small ones do not exceed 1 cm in length & width.

In Japan, I can enumerate nine forms, which have the following characteristic leaves, respectively: 1) green, 2) small and green, 3) small and glaucous green, 4) light red or purple, 5) small & light-red or purple 6) small & glaucous light-red or purple, 7) red-purple, 8) small & red-purple, and 9) small & glaucous red-purple. Among them, 1) seems to be fundamental form and others were probably derived from it.

Xanthoxalis corniculata has two kinds of stem, i.e. the long shoot and short one. The former is creeping over, but often, under the earth surface and has adventive roots but no flower. While, the later is not repent but floriferous, and can be distinguished in four forms (decumbent, decumbent-ascendent, ascendent and erect.)

X. corniculata var. *erecta* Hatusima et Nakasima is merely a form which derived from the fundamental form with ascendent stems.

○ ツタノハヒルガホが一時歸化した (久内清孝) (Kiyotaka HISAUCHI: *Merremia hederacea* is found occasionally in Tokyo.)

筆者は自然研究第 1 卷 4 號 (1947) p. 17 に於て「東京の廢失區域に現れた若干の植物」なる題下に 1 種所屬不明の草本を圖説した (其第 3 圖)。爾來其所屬の判明する日の到來せんことを期待して居たところ、はからずも、それに該當する腊葉が東大腊葉室に珍藏されていることに気付いた。その時前川文夫氏も來合せたので同氏の同意を得て、これが *Merremia hederacea* Hausskn. 和名ツタノハヒルガホであると決定した。對比した標本は臺南、唯肥岬 (Oct. 1905) 産のもので和名は松村先生の手記らしく思はれる。別に大渡忠三郎氏が臺灣 (27 Nov. 1896) でとられたものがあり、これにはアサガホモドキの手記がある。これは葉が強く 3 裂しないもので Wight の *Icones* に圖説してある形であり、當時これ等が別種と思はれたものらしい。尙この草は前川氏も都内大久保で (Jun. 1945) 採つて居られる。本屬のものは果實が不整に縦裂し、花粉が平滑な點で

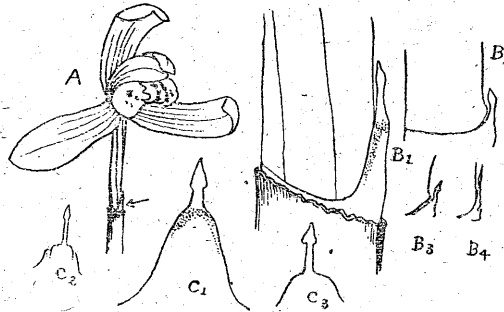
3) 量的に本型が最も多いからアカカタバミの名前をこれに保留す。

Ipomoea 屬から區別される。我々が花を得られなかつたのは上記の通り、花期がおそく其頃日本では霜になるためと思はれる。この草も一夏だけ歸化したことになる。

○シュンランの花序について (津山 尙) (Takasi TUYAMA: On the inflorescence of *Cymbidium virescens* etc.)

シュンランの花は花序の先端に單生しているように見えるが、よく見ると花序の最も上部に位置する鱗片状の苞の基部に附圖のような、長さ 2—3.5 mm ばかりの痕跡的な花序の先端があるのに気が付く。これによつて單生的に見える花は實は同屬の他種の植物に普通見る所の總狀花序の最下の 1 花が發達したものであることが判り、又本來ならばシュンランも正常な總狀花序を有したものであることが想像される。所が總狀花序を有する同屬の他種に於ては、他の多くのラン科植物の花に於て見られるように、子房が(或は時に花梗と共に) 180° 捻轉して、本來ならば花莖の軸の方に向うべき唇瓣が、反轉して花を受ける苞の上を越えて外方に向つてゐるのである。この廻轉は唇瓣が昆虫の受粉又は吸蜜行動を對象

として進化したと言う考え
方からすればさぶる合理的
に出來ているし、事實そ
うした唇瓣を有するラン科
植物に子房の捻轉が起らな
かつた場合には、唇瓣の展
開が花莖軸又は相隣他の
花の花部器官につき當つて
充分に出來ず、受粉を全う
することが出來ないであら
う。所がシュンランに於て
は子房が捻轉せず、従つて



A. シュンランの花序一苞を取り去つて、退化した花序軸の先端を示す。B₁—4 退化花序軸の側面觀。C₁—3 同上の背面觀。(倍率は各種、點描部は紫斑部を示す)

花はそれを受ける苞を背にして花序軸の方に向つてゐる。しかしこの場合は花序軸が退化して、單一花になつてゐるのであるから、上に述べ障害は起らないわけである。本來單一花を有するトキソウ、アツモリソウ、クマガイソウ、ホテイラン、サワラン等でも同様の理由によつて捻轉が起つてゐない。正常の總狀花序を有するラン科植物で捻轉が起つてゐない例は日本産のものではクモラン、ヒメノヤガラ等特殊なものに見られる。かかるものでは唇瓣の廣がりや花梗に子房を加えたものの長さとの關係において上に述べた障害が起らないものに限られてゐるし、又昆虫との關係においてもその位置において何等無理がない様に發達してゐるものであらう。シュンランに於ては栽培家が珍重する所の双頭花なるものがあつて、花序軸上の最下の 2 花が互に著しく接近した位置